

パウロは「わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のことをいつも神に感謝しています。」と手紙の最初でテサロニケの教会のことを思い祈ります。テサロニケの教会はパウロが立てた教会でした。そこにはまず感謝が述べられます。そして「あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。」と続けます。

パウロは教会の労苦と忍耐を心に留めています。パウロが多くの手紙を残した理由は、パウロがその教会をたずねることができなかったことが大きいのです。自分が創立に関わり、その後もパウロを頼りとしていた教会でもそこに行くことができないことが多かったのです。しかし、パウロはそこに聖霊が働いていたことを感謝します。忍耐の時にこそ聖霊が働かれていることが明らかになることを何度も経験してきたからです。六節には「そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者」となつたと言います。

それは、苦しみの時こそ、何に信頼し何を基準に生きているのかが分かるからです。パウロは忍耐強い信仰を持つテサロニケの教会を「わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです。あなたがたはわたしたちにとつて愛する者となつたからです。」と「いとおしく思っ

ていた」(二章八節)のです。それは、「わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れた」(二三節)ということに関わっています。パウロたちの言葉、つまり人の言葉が神の言葉として聞かれたのです。わたしはある牧師の隠退されるとき挨拶を思い出します。それは自分はずっと説教をしてきた、それは人が神の言葉を語るといふ不可能なことをしなければならなかった。そのために努力し、苦しまねばならなかったといふのです。人の言葉が神の言葉となる。それは聖霊の存在なしにはあり得ないことです。そのように聖霊の働く教会にはいとおしさがもたらされるのです。

もう一度六く七節を見ますと「あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至つたのです」とあります。聖霊の働く教会は「主に倣う」教会です。それは十字架の苦しみを負う主に倣うことです。

十字架の主を覚えることは、その方が復活されたことへと導かれます。パウロは九、一〇節で「すなわち、わたしたちがあなたがたのところまでどのように迎えられたか、また、あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、更にまた、どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださいるイエスです。」と宣言します。

この宣言のように、わたしたちは復活の御子の再臨の待望に生きることができません。今日は聖餐に与ります。聖餐の言葉の中に「聖霊はここに主御自身が臨在されることを確かめてくださいます。」という言葉があります。説教と共に聖餐が守られるとき、聖霊がまさに主イエスがここにいてくださることを確かなものにしてくださるのです。

(五月二十八日)

ペンテコステ・聖霊降臨日礼拝)

## 四月講壇一覽

第一主日 (四月二日) 棕櫚の主日礼拝

「命をゆだね」 高橋和人牧師

詩編 八八・二く一九

ルカ 二三・四四く四九

第二主日 (四月九日) イースター礼拝

「復活を受け継いで」 高橋和人牧師

ヨブ 一九・二く二七

コリントI 一五・一く一一

第三主日 (四月一六日) 公同礼拝

「世の終わりの知恵」 高橋和人牧師

詩編 七八・一く八

マタイ 一三・二四く四三

第四主日 (四月二十三日) 公同礼拝

「主イエスの昇天の恵み」 姜俔米牧師

詩編 九六・一く三

使徒言行録 一・六く一一